

シアチウ物語^下



中国の児童文学・10

ホアン クー リウ

黄谷柳・作 さねとうけいしゅう・しまだまさお・訳



シアチウ物語_下

中国の児童文学・10

黄 谷柳・作

さねとうけいしゅう・しまだまさお・訳

古川益三・絵



おとなりの国——中国には、

はじめから浮浪児^{ふうろうじ}はいなかったのでしょうか？

いいえ、いっぱいいました。

シアチウたちが、その生き証人です。

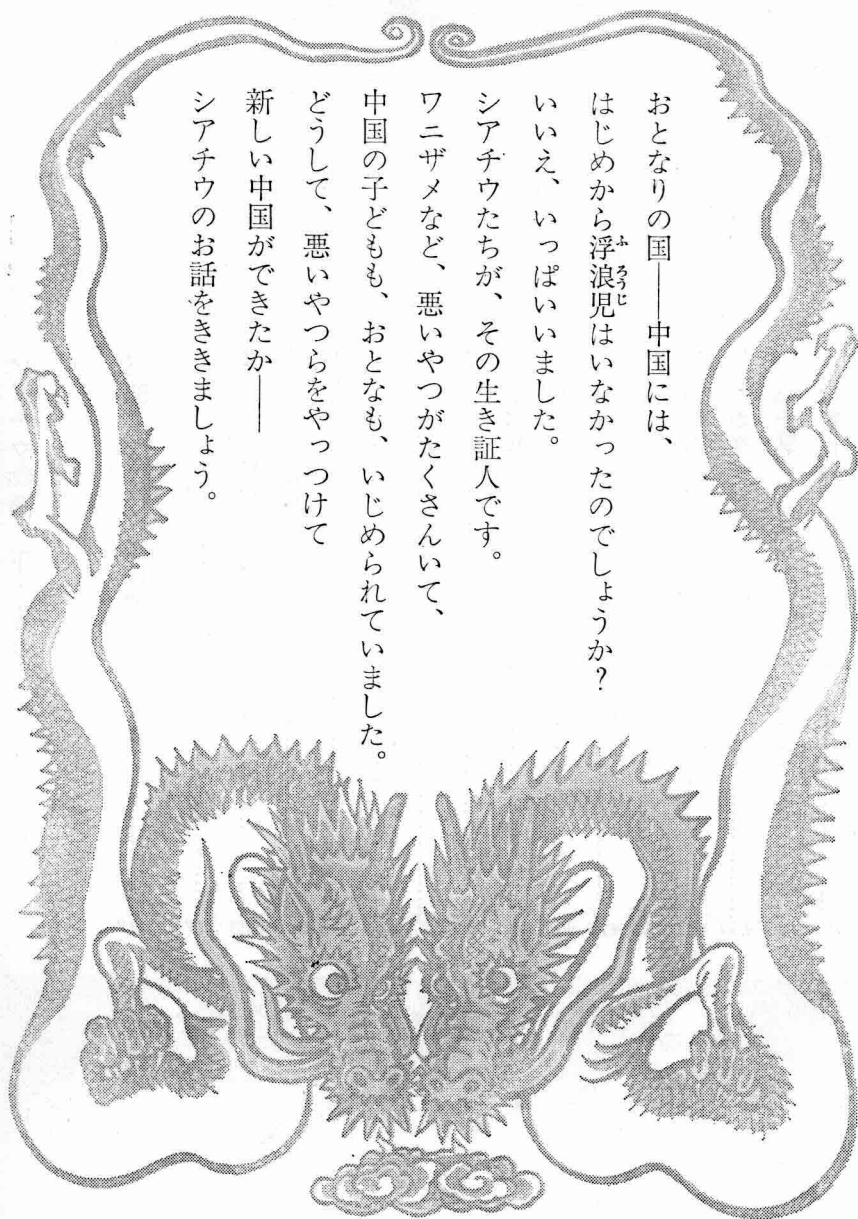
ワニザメなど、悪いやつがたくさんいて、

中国の子どもも、おとなも、いじめられていました。

どうして、悪いやつらをやっつけて

新しい中国ができたか——

シアチウのお話をききましょう。



シアチウ物語^下

中国の児童文学 10

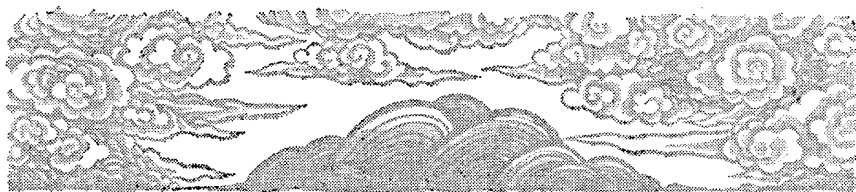
^{ホアン}黄 ^{リウ}谷 柳 作

さねとうけいしゅう 訳
しまだまさお

^{ふる}古 ^{かわ}川 ^{ます}益 ^{ぞう}三 絵



母と子の図書室

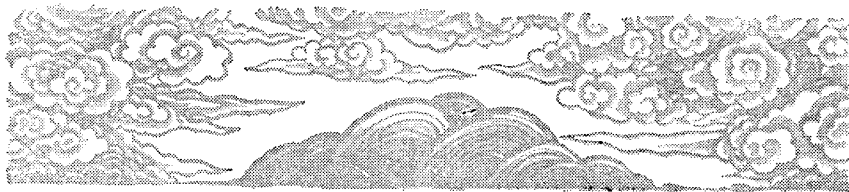


シアチウ物語 下 もくじ

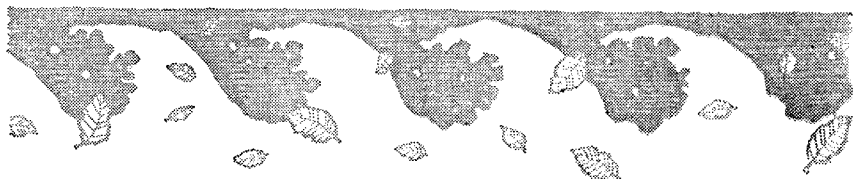
第三部 山は長く水は遠し

1	死者と生者	317
2	魂を質にいられた人	328
3	はて、どうしよう?	342
4	もとのもくあみ	353
5	通い船	365
6	生き観音の説教	377
7	鉄の部隊	386
8	やぶれた夢	395
9	じぶんで選んだ道	402
10	浮浪児の家	415
11	もときた道へ	429
12	めずらしい贈物	441
13	この衛生部員	450
14	第一課、しらみをとること	463
15	戦勝祝いの夜会	475





16	沙水 ^{シャスイ} の血けむり	483
17	名射撃手	499
18	一つの難題	504
19	後方病院	513
20	人と薬と服装と	531
21	問題の人物	538
22	虎 ^{とら} の口ひげ	549
23	海洋のような陸地	581
24	戦闘の喜び	591
	「冒険者の楽園」は消えた——あとがきに代えて	611



第三部 山は長く水は遠し

1 死者と生者



艦長ワニザメの密輸艦が、香港の港外の大嶼山付近で沈没して、乗組員のうち、死んだものは魚に食われてしまいか、波のために海岸にうちあげられ、生きているものは、それぞれ、じぶんのめざす方に進んでいった。ただワニザメだけは、海岸の岩のあいだにかくれていて、じっとして出てこなかった。かれは草や木の葉で、かくれている洞の入口をふさいで部下から見つけられないようにした。かれは、兵隊たちが、死体から金目のものをうばいとうろとして、けんかになりかけたのを、航海長がおしとどめたのや、シアチウが眠りからさめて、浜に走っていったのや、かれらがけんかをやめて、お金を分けあったのや、かれの内妻

黒牡丹と豪商であるウェイ支配人を埋めたのを見ていた。

これらのすべてのことは、かれの目にはうつたが、かれの心を動かすほどではなかった。かれは、ここから姿をあらわして、みんなといっしょになるなんてことは、夢にも考えてみなかった。人びとは、死んだものをほうむって涙を流していたが、かれと死者との関係は、だれよりも深かったのに、かれは死んだものになりたいして哀悼する気持は、これっぽちもなかった。かれは、石のように冷たい心のもちぬしだった。かれは、岩穴のなかで、あのひんやりする一挺のピストルと、いくらが残っている弾とをふき、それから身につけていたアメリカのドル紙幣や香港紙幣や銀行通帳をかわかしていた。かれは、これらのものを、じぶんの命とおなじくらいに大切にした。かれは、こっそりと、これらの品をしまった。ちょうど、いま、かれが、その体を洞穴にかくしているように。

ロン航海長が子牛をほうむってから、ピストルをとりだし、空に向けて「バン！」とぶっぱなしたので、ワニザメは、はっと驚いた。かれは、本能的にピストルをにぎりしめ、洞穴の入口に向かって、防御の身がまえをした。

やがてロン航海長やシアチウが、わっというて山にのぼっていったので、ワニザメは、やっど、ほっとした。かれは、洞のなかで、ながいこと横になり、これからの出なおしについて、じっと考えにふけた。第一にしなければならぬことは、まず一隻の漁船を見つけて、おどかしたり札びらをきったりして、荃湾に連れていってもらふこと。それから、まわり道をして広東に帰り、そのうえで、はかりごとをめぐらすのだ。

太陽が山にかくれると、ワニザメは洞穴を出た。砂浜には波にうちあげられた死体が三つ四つ横たわっていた。顔のかたちも変になり、腹は太鼓腹になっていた。かれは溺死した部下を正視する気になれなかった。かれは黒牡丹とウェイ支配人、それとはべつに子牛をほうむった、この二つの土まんじゅうの前にやってきた。かれは迷信家で、かれらの幽霊がそこらに迷っており、それがかれにとつて命をとりはしないかと思うと、体じゅうの毛がさかだつのであった。谷あいからしめっぽい風が吹いてくると、はっとして、身ぶるいし、ひざがしらもがたがたになり、その場にひざまずいてしまった。そして口に出して、こう

いった。

「生きたものは安穩に暮せ、死んだものは極楽にいけましように！ あの時とこの世はそれぞれに、たがいにうまくいきますように！ 子牛！ 黒牡丹！ ウェイ支配人！ おれは帰ったら、きつとおまえたちのために墓をつくつてやるから、迷わず往生しなよ！」

そういつてから、三度おじぎをすると、いそいで立ちあがって、あとをも見ずに逃げだした。

たそがれ時になると、海上のあちこちに帰りを急ぐ漁船の姿が見えだした。ワニザメは浜べの岩の上で待っていたが、やがて大声で一隻の小舟を呼びよせた。その舟には、年とった漁夫とその老妻がいるだけだった。ワニザメは、その舟におどりあがり、漁夫に向かっていった。

「船頭さん、おれを荃湾まで連れてつてくれ！ 半月分の食いぶちはやるぞ！」

そういつて船頭の顔をうかがい、ピストルと五、六枚の香港紙幣をとりだし、その紙幣を船頭の手にのせた。

船頭は紙幣を受けとり、また、ピストルをちらと見て、女房にいつけた。

「荃灣行きだ！ 帆をあげろ！」

船頭たちは海賊にやられつけていて、海賊が容易ならぬ相手であることを、よく知っている。船頭は、小舟を荃灣の方向に走らせるはかばかかった。

八人の男たち、兵隊五人、水夫一人、それに航海長とシアチウ、かれらは坑尾という小さな村までやってきた。かれらは村の人に、難船してやっと助かったものであることを説明した。たくさんの村人が、かれらをとるかこんで、難船のいきさつをきいた。

八人は籠に一ぱい、さつまいもを買って、煮てたべ、腹ごしらえをしてから、一人を大澳までやって、いくそろいかの上着とズボンを買ってこさせ、それから村の人のやとってくれた漁船に乗って、青山灣に向かった。青山灣にいく、というのは、シアチウがいだしたことである。かれはいった。

「大澳から香港までは、まいにち汽船がいくけど、おいらのような見しらぬ人間が波止場に着くと、検査のとき、きつとやっかいなことになるぜ。そのうえ、おいらはピスト

ルも持っているから、きつとめつかつて、牢屋行きだあ。それよりも船をやとって青山までいく。青山の下には密輸船がたくさんいて、いつも中国領の方に行き来している。そこまでいけば、どうにでもならあ。」

みんなは、すぐにかれの意見に賛成した。

これから、どうして暮していこう？ これがいちばん大切な問題であり、かれらが船の上であれこれと議論したのも、これだった。

最初に「山に入ろう」といいだした兵隊は、班長で、吳猛という名、二七〇八歳、欽州の生れ。一五三旅団の兵隊で、山東省の定陶でたいへんな負けいくさをして、全旅団全滅、五、〇〇〇人あまりの将卒とともに捕虜になった。釈放されてから広東に帰り、またも兵隊になった。かれは、もとの上官である張瑞貴の出世物語に、ひどくあこがれた。かれの頭は緑林の大王という考えでいっぱいであつた。かれは、みんなにいづいた。

「なあ！ 出世するには、うら道を歩くよりかはねえ！ うら道のうちで、いちばんいいのは、山に入つて土匪となることさ。おれのもとの上官の『生き張飛』だって緑林の

出身だものな！ おれたち三〇四〇〇人が集まれば、うまくいけば王さま、まずくいても盗賊団だ。政府が妥協して呼びよせるとなれば、師団長や旅団長にはなれないとしても、大隊長がところはまちげえなした。こんな乱世には、たいていの人間が、この道で出世するんだ。おれたちだつて、それにかぎるじゃねえか？」

かれの部下の四人の兄弟のうち三人は、すぐに、班長のいうことに賛成した。ただひとり、三〇歳ぐらいの鶴山の生れの林四海だけは、班長の意見に反対した。かれはいつた。

「わたしにも少々考えがありますでな、あつさりと皆さんにいつてみましょう。わたしや、これまで世界はどこでもわが家だ、という考えがあつたもんです。だから山に入つて金持からうばい、貧乏人にほどこす、ということも、まんざらでもねえと思います。しかし、われわれ八人にピストルたつた一挺では、たいしたことできませんまい。もしもしくじつたら、それこそ、ろくなことはありませんぜ。わたしの考えでは、一つのうめえやり方があります。みんなが、しばらく身をひそめて、ゆっくりと羽根をのば

す時期を待つことであらう。」

本をたくさん読んでいるのと、学問が好きなのは、なんといつてもロン航海長だが、暮しのこととなると、かれにはさっぱりいい考えが浮ばない。かれはリン・スーハイをうながした。

「リンさん、きみの、その、うまい考えというのを、きかせてくれよ。」

リン・スーハイはいった。

「土農工商から、緑林の土匪まで、かぞえてみりやあ、七三と商売の数ありますが、なれねえこたあ、できねえもんです。土匪になるこたあ、わたしにや、からつきしだめですが、茶屋とか料理屋なら、わたしもくろ、うとの方でさあ。わたしは八年も一〇年も糠頭をやってきました。糠頭っていうのが、みなさんわかりますかい？ 糠頭というのは、茶楼の出口の番台で帳面をつけている、あれですよ。チップを分けるときには、例のとおり二人まえをとる。あれです。わたしは、先月は、まだ故郷の鶴山と高明とのさかいのところ、女房といっしょに茶屋をひらいてましてね、行き来の客をもてなして、まんざらではなかつたも

んです。ところがある日、町に買物にいきましたところを、通りかかった兵隊につかまって、広東に連れてこられて兵隊にされ、それからあのよたよた軍艦に乗って、武器の運送をさせられたってわけです。わたしは、これから、帰っていった、女房のしごとを立てなおしてやろうと思うんですがね。みなさんは、わたしと生死、艱難をともにした友だちですからなあ。もし、みなさんが、わたしのせまっこい郷里をおきらいにならないなら、どうです、ひとつ、みんなで資本を出しあって、やってみませんか。だれがさいはいをふるおうと、わたしは、へいきでさあ。このたび、さいなんにあつたため、世のなかのことは、どちらでもいい、一日一日が、たべていければそれでいい、というような気持ちになりました。一〇〇歳まで長生きしたいとか、師団長や旅団長になりたい、などとは、てんで思わなくなりましたわい。どうです、みなさんの考えは？」

ロン航海長は、リン・スーハイのこの唯食主義の議論と提案とをきいて、たいして進歩的なものとは思えなかったが、しかし、いかにも扇動的であり、そのうえ、ひじょうに現実的であって、ウー・モンの緑林主義の空想と冒険にくら

べると、人情にもかない、長くもちこたえて、おもむろに将来のことがきめられると感じた。茶屋や料理屋をするとは、正当な商売であって、人の家におそいかかる緑林の生活よりは、ずっといい。しかし、かれは、これについて、なんの意見もはかない。かれは水夫の羅才にたずねた。

「きみには、どんな考えがあるかね？」

ルオ・ツアイは、きつぱりと答えた。

「わしはいなかの東莞で料理番をやっていたんだ。一〇人分の八テールぐらいの料理なら、他人の手などは借りやしない。わしは、それに、東莞の腸の塩漬だって、つくることができるんだ。もし茶店をひらくというなら、わしの持ち金は、残らず出しますぞ。」

航海長は、最後に、シアチウにたずねた。

「きみは？ きみにはどんな考えがあるのかね？ 青山に

着いたら、また九竜波止場に帰っていった、パンを売るかね？」

シアチウは答えた。

「おいらゝ家に帰るんなら、大澳から汽船に乗って、いまはもう港に着いてらあ。おいらゝはじめウー兄貴が山に入

るといふから、山に入つて、遊撃隊になるのかと思つてゐた。土匪になるなら、おいらゝいやだ！」

航海長はきいた。

「遊撃隊になるつて？ きみは、どうやつて遊撃隊になるか、知つてゐるかい？」

「おいらゝ知らない。兄貴たちが連れてつてくれれば、ならつて、やるよ。」

ウー・モンが口をはさんだ。

「おれの考えも、やつぱり遊撃隊になるということだ。ただ、もつとはつきりいつてみただけだ。じつさい世のなかの遊撃隊というものは、みんな、おなじようなものさ。おれは山東省・江蘇省一帯で、ちよいちよい遊撃隊を見たことがあるがね、やつらは、あつちこつちと歩きまわつて、じぶんでは田をつくらねえもの。人民のものをとつて食うよりほかはないじゃないか！」

航海長が、反ばくしていった。

「きみは、まちがつてゐるよ。そんなに一〇ば一からげにいうものではないよ。遊撃隊にも何十種とある。そのうちでぜったいに人民のものをかすめとらないのがある。かれ

らは人民自身の軍隊で、もつぱら貧乏に苦しむ多くの人民の幸福をはかり、害虫をのぞくことをやつてゐる。かれらは、ほんのわずかばかり、無理のないような租税をとり、無理のないように食糧を出させる。軍隊の補充だつて、じぶんから志願した人民をとるので、けつしてリン・スーハイをつかまえたときのように、なわでしばるようなことはない。きみ、よく知りもしないで、かつてなことをしゃべつては困るよ。」

ウー・モンがいった。

「わかつた。あんたは、そんなにはつきりしたことを知つてゐるなら、大將になつて、おれたちを連れてつてくれよ！」

航海長はいった。

「われわれ八人にただ一挺のピストルで、遊撃隊になつてごらん、地形はわからず、敵のようすはわからず、土匪や盗賊になつたのでは、うだつはあがらない。やつぱり生きながらえていて、ゆつくりおりを待とう。」

リン・スーハイは笑いながらいった。

「ウー班長は、たぶん、山の大王となつて、山の神でも、めとろうというのでしょ？」

それをきいて、みんなが、どっと笑った。

航海長は、しばらく考えこんでから、まじめになつていつた。

「ぼくが大尉航海長という資格で、しばらく、みんなの座長になつて、みんなの意見をきめ、そして、われわれの、これからの行動をきめよう。いま、二つの意見がある。一つは山に入って盗賊団をつくること、一つは資本を集めて商売をすること。このほかに意見はないかね? —— ないなら、これから採決しよう。みんな、じぶんの思うようにやつてもらふ。けつして無理をする必要はない。では、資本を集めて商売することに賛成するものは、手をあげてくれ!」

リン・スーハイ、ロン航海長、シアチウ、ルオ・ツァイ、この四人の手が、まっさきにあがつた。兵隊の関貴廷は台山の生れであるから、鶴山にいつて商売するのは、じぶんのいなかへ帰るようなものだから、かれも手をあげた。そのほかの二人の兵隊、一人は原籍が湖南省嘉禾で、ながく広東に住んでいる胡万順、一人は高要の生れの廖志强、この二人も、コアン・コイティンにつれて手をあげた。ウ

ー・モンは兵隊たちの心が動いたのを見て、大声でどなつた。

「よからう! おれは機関銃をうつことよりほか、なんのとリエもねえから、しばらく、商売がえをして、みんなの手伝いをして、火たきでもやろうや。」

航海長はいった。

「みんなが商売に賛成だから、では、リン・スーハイの好意をうけて、資本を出しあつて茶店をひらくことにしよう。なにしろ、みんなは、まず第一にたべていけるようにして、それから發展を考えることにしよう。もしもたべていけないときには、またべつのことを考えることにしよう。馬から落ちて、かちでいつても、いずれは道がひらけてくるものだからなあ。」

航海長がそういつてしまうと、みんなは、一人ひとり、かれらの開業についての意見をのべた。それはまるで、いまず茶店をひらくようなさわざだ。しかし、シアチウだけは、だまりこくつていた。かれは子牛の惨死を思いだし、たまらない気持になるのであつた。

シアチウは、みんなが青山で船待ちをして、なにもする

ことの無いのを見て、航海長にそういつて、家に帰って暮ることにした。青山のふもとについて青山新軒にいき、道ばたの小さなたべもの屋にすわって、元朗から香港に向かい新軒に着く一六号のバスを待つていた。このあたりは、よくきたところで、この小さなたべもの屋の門前でバナナをたべながら、近くの芳園大学の女子学生の歌をきき、彼女たちの身の上についてきいたことがある。そのころ、ここにすわっていたシアチウの、生活についての考えは、まだあまいで、がむしゃらにぶつかってみる、というだけであつた。そのころ考えていた、鉄砲を持つて、カモをうったり、どろぼうをうとうという、おろかな夢も、いまでは活路をひらき、暮しをたてるために、小さな商売をしていこうという考えにかわっている。もしも現在でも、やはりただ一人で、この社会の、ありとあらゆる悪魔とたたかつていくというのだつたら、かれはきつと傷だらけになり、そしてさびしく地面にうち倒れ、町でよく見かけるあのだれひとり目もかけない子ども死骸のようになってしまふことだろう。しかし、かれもいまでは、苦しい流浪の生活をしてきて、拘留・捕縛・殴打などをうけてきて、やつ

とのことで九死に一生をえたが、またもき使われ、だまされ、そして、また九死に一生をえたのであつた。これらの経験は、かれをみがいて、まえよりも老練にした。かれのまなこは開けてきて、一日一日とものごとがわかつてきた。たとえば遊撃隊のことにしてもそうだ。このことは羅浮山にのぼつて剣術を学ぶというような、そんなかんたんなことではない。かれは知つてきた、じぶんとおなじように遊撃隊に入つて生きていきたい、と思つているものは千人も万人もあるが、その決心をしたものには機会がなく、機会有る人には決心がつかない、ある人びとは、てつきり遊撃隊になつたと思つていても、それは土匪流賊であつたりすることを。世のなかのことは頭のなかで考えたように、そんなになまやさしいものではない、ということもかれは知つてきた。たとえばワニザメという人間にしてもそうだ。かれは善人であらうか？ それとも悪人であらうか？ かれに長いことくつついてみると、ふだん錢ばなれがよくて親分肌なところや、しごとのやりつぷりにだまされて、たくさんの人がすっかり無条件にかれを尊敬するが、さて、艱難がふりかかつてきたとなると、あんなにもきも

が小さくて、陰険で、卑劣で、どくどくしくて、人を殺してもまばたきもしない。ふだん太つ腹で客を好むのは、ほんとうは偽装ぎさうの手段であつて、まったくあの手で人をだまし、人の命をとっているのだ。シアチウには、そんなことがわかつてきた。ものごとを経験しないと、知恵は生れてこない。シアチウが、まがりくねつた道を歩いてきたことは、つまりは、たいしたことを学んだのである。かれは、これらの教訓を心にきざみこんだ。まえに、ティン兄貴をたずねて、たずねあたらず、そこで帰ってきて野良犬のワンに身売りをした。あのときは、ひとりぼっちだったからだ。いまは友だちがいる。友だちが、いい人間か悪い人間か、いまはなんともいえない。しかし、おたがいにくそはない。いっしょになつてしごとをすれば、ひとりぼっちで生きていくのよりは、ずっといい。一人では、なんの相談もできないが、人数が多ければ、なんでも相談ができる。諺ことわざにも、三人寄れば文珠もんじゆの知恵、とあるとおりだ。これが、シアチウの現在の個人と集団についての考えであつて、この考えは、かれが生活のうずのなかに、もがき苦しんだのち、やっとのことではっきりしたことである。

青山新アサヒシン野ノのようすも、シアチウの体や心の変化とおなじように、あきらかに変化していた。新しい茶店が二軒もふえており、そのかまえも、もとのものより、ずっと上品でさっぱりしていた。芳園フアノエン大学の学生も新入生がたくさんいた。かれらはくるものもあり、いくものもあった。かれらのなかにも、やはりシアチウとおなじ考えをもつたものがあるのであろうか？ かれらのなかには、シアチウのような人間と友だちになり、シアチウのような人間にひきつれられてしごとをしたいと思うものはないのであろうか？ シアチウの考えでは、ある！ きつとある！ ロン航海長もその一人ではあるまいか！ かれは、あきるほど本を読んでいて、それでおいらと友だちになり、おいらをひきまわしているではないか！ かれは、だんだんあつさりとした身なりにかわつていく男女学生をながめながら、いろんなことを考えていた。一台のバスがとまった。かれは、いそいでとびのつた。

二時間のうち、シアチウはまたバスに乗つて、ひきかえしてきた。母親は台山タイサンに帰つていて、まだ出てきていなかった。かれはすぐに青山アサヒヤンに帰つてきて、一隊に加わつた。

ワニザメは、臺灣の小舟のなかで一夜をあかし、くわしい計画をめぐらした。ぜひとも安全に香港を離れたい、一本の頭髮すらも失いたくない、と思った。かれは、ふつうによくある国産木綿の短い上着やズボンを買って、小商人のように変装した。ピストルは右ひじの内側にくりつけてあったので、検査のときに手を上げて、上から下まで、体をさぐられても、さしつかえないようにされていた。もしもだれかがまえもって耳うちしていなかったとしたら、一〇人の検査官のうち九人までは、見つけずに通すことを、かれは知っていた。かれはまた輸送艦に変事の起こったことを報告するための二通の電報を用意した。一通はマール顧問にうって手続きをすませるためであり、一通はチャン・クオ老人にあてていいわけをするためである。かれは、それをホンチャン汽船会社のホー・ラオスーにたのんで、いそいでうってもらった。すべてがうまくいくと、かれは、いちばんおそい深圳行き（シンセン）の貨車（カゴ）に乗り、深圳駅に着くちょっと手前で車からとびおり、よく知っている小路づたいに、中国とイギリスの境界になっている文錦の渡（ワンチン）を遠まわし

て、川を渡って深圳の駅に着いた。駅に着くと、客貨混合の普通列車が何時に広東に向けて発車するかをたずねた。かれが急行列車に乘らないのは、ひとつは計略なので、人畜混合の貨車に乘って、列車に乗りこんでいる検査官に、持っているアメリカや香港の紙幣をさがしだされないようにするためである。

あくる日になって、かれはやっと、そういう普通車に乗ることができた。屋根のある車には人がいっぱいであつた。かれは、同様に人がいっぱい乗っている無蓋のふちの高い鉄貨車によじのぼり、ほかの人の足もとで、まどろんだ。

列車が石竜駅に着いたとき、ワニザメは目をさました。かれは立ちあがって、たべものを買ってたべながら、あたりの人びとを観察した。かれはすこぶる安心した。一人もじぶんを知っている人がいない。駅の守備隊は一五四旅団で、この部隊の中・上級将校のなかには、かれの知り合いが多かった。この旅団は一五三旅団とおなじように、あまり光榮といわれない歴史をもっていることを、かれは知っている。その将校たちは、よく、かれにその物語をしたものだ。

「はずかしいことには、われわれは山東省南部・江蘇省北部で、あまりきれいでないいくさをやりましたよ。」

この、見かけのいいことばのなかの「あまりきれいでない」というのは、けっきょくは、どんな意味をもっているかを、ワニザメはよく知っていた。かれは駅のそこここに立っている兵隊の装備は、たいして悪くないと思った。ただ、兵隊の体格や顔色はよくないと思った。かれは、かれらを自分の部下の栄養状態とくらべてみて、ずいぶん悪いと思った。そう思うと愉快であった。かれの兵隊は、よくたべて、のらくらしているが、体力だけはりっぱだから、必要なときには、突撃して敵城をおとしれることができる。かれは、ガニマタの七と吸いがらのチェンという二人の有力な幹部、その一人は勇壮で、一人は知謀にたけていることを思いだした。かれは、よくよくかれらを育て、かれらを重用しようとした。かれはまたチャン・クオ老人を思いだした。あの老人はまるで一〇〇年の老樹のようである。幹も枯れ、枝も枯れている。しかも地下の根は、おそるべき力をもっている。いまの政府の高官にも、手を出して、かれをのぞく度胸のあるものがない。それどころ

か、みんな、かれによって、この山河をたもとうとしているのである。しかしワニザメは、チャン・クオ老人の「銃は人の手から離すものではない、人は郷里から離れるものではない」という封建的な考えを、むかしどおりに守っていて、新しい一隅をおしやぶっていく旺盛な企画心がないのには感心しなかった。それでは、どうして大事をなしとげられようか！ ワニザメは、将来いずれの日にか、わかるであろうと思った。けっきょくチャン・クオ老人がじぶんよりもうわてであるか、それとも、じぶんがチャン・クオ老人よりもうわてであるか、ということが。チャン・クオ老人のチャン・クオ老人たるところは、まったくのところで、「銃は人の手から離すものではない、人は郷里を離れるものではない」ということのすごさを知っているところにある。かれが、この考えを、とおしていくかぎり、かれの根は、いつまでも残るであろう。ワニザメは、このふちの高い車の上で、広東の最近の形勢がどんなに変化しているかを考えていた。かれの足が、広東の地面を踏むやいなや、かれの運命は、すっかりきまってしまったていて、実行にうつすばかりになっているのかもしれない。これらのことにつ